

どこか違和感を覚える文 ——チェンバレン、アストンの文法論から見て——

On Sentences Composed Somehow Incongruously

大久保 恵子

OKUBO Keiko

1. はじめに

言葉は一度口に出してしまえば引っ込めることはできないから、間違っただと思ったら訂正するしかない。日本語は終わりまで聞かないと肯定か否定かさえ分からないと言われるが、音声に頼る話し言葉だけでなく、後から訂正することができるはずの文字表記の言葉でも、さまざまな要因で分かりにくかったり、誤解を招いたりするような文になっていることが少なくない。

「消防ではくわしい火事の原因を調査することになっています。」というコメントがニュースの中で聞かれることがある。この文に文法上不適切なところはない。「くわしい」は「火事」について言うか、そうでなければ「原因」についていうことになる。しかし、「くわしい火事」ということはありえないから「くわしい原因」ということになるとして、これは論理的な語といえるだろうか。実際には「くわしく調査する」のでなければなるまい。発話する側は忙しさのせいというかもしれない。受け手の側ではあまりに多くの情報に取り巻かれていて、表現の細部にまで注意しては遅れをとるというかもしれない。しかし情報が正しく伝わらなければ、目的が達せられたとはいえない。

上のような例を初めとして、日常眼や耳にしてオヤと思ったことがおそらく誰にでも何度かあるだろう。最近の10年ほどの間、いろいろな意味で違和感を覚える文例を折に触れて採集してきた。その中からいくつかの例を挙げて、語句の修飾・被修飾関係、並列の関係、テンスなどに関する問題を考える。西洋人の説く日本語文法書について多少調べたことがあるが、日本語の特徴に関する彼らの指摘には思いがけない新しい見方があって教えられることも多い。本稿ではB.H.チェンバレンやW.G.アストンの見方も紹介する。

なお、以下に挙げる例文のうち、ラジオやTVの音声など耳から得たものは、現実とは逆にごくわずかで、大部分は新聞あるいは書籍から得たものである。また、出典を明らかにせぬまま話を進めることは適当でないと考えたので、後に記すことにした。それぞれの著者・筆者に失礼な点がある場合はお許しいただくようお願いしたい。誤植ということも考えられるが、一応誤植ではないものとして扱うことにする。

2. 修飾・被修飾関係に疑問のある例文とその分析

- 1) われわれが中学生時代はまだまだ平穏な世相。
- 2) 二人は数年前、ライス氏がスタンフォード大学教授時代に知り合った。

- 3) 本書は明治11年6月から9月にかけて約3ヶ月間、東京から北海道までの旅行の記録で、
- 4) 水曜日の午後1時半に、堀切への招待状が入っていた。
- 5) ナチスドイツの犯行をソヴィエト政権による虐殺であるかのごとき報道は許せない。
- 6) 夜間空襲は、焼夷弾による都市を焼きはらうことを唯一の目的としていた。
- 7) もしロシア帝国との戦いに敗れていたなら、東洋は全面的に欧米の植民地化されていたに違いない。
- 8) 従来の一枝を夫に捨てられた妻説が誤りであることを再言することになるが、
- 9) 肉骨粉の反すう動物に使用禁止。
- 10) 日本は地域による条件の差があったとしても世界でも稀にみる平等に、低コストで高度の医療が受けられる国である。

1)、2) はともに主格と思われる句を受ける用言がないまま文が続いていく形である。ガを連体格と見るのは、他の部分との整合性からいって無理だろう。

3) は「約3ヶ月間」という名詞転用の時間副詞を用いながら、その副詞を受けるべき用言が見当たらない。

4) は「午後1時半に堀切へおいでください」という招待状であることが文脈から分かるが、文法的にみれば「午後1時半に」は「入っていた」を修飾するということになってしまう。

5) では「ナチスドイツの犯行を」という連用句を受けるべき用言が見当たらない。書き換え代案としてはいくつか考えられる。「犯行を」を「犯行が」として「である」が受ける形にする、あるいは「である」という存在動詞を「とする」という動詞句にするなどである。

6) これは「焼夷弾による」という連体句に下接する体言が正当な受け手ではない例である。文中にこの連体句を受ける語句はない。

7) では連体句「欧米の」を受ける体言が「植民地」ではあっても「植民地化」ではないために違和感があるのだと考えられる。

8) の一枝は富本一枝（尾竹紅吉）である（夫は陶芸家富本健吉）。全体の意味を考えれば、「従来」という連体句は下接する「一枝」でなくずっと後にある「説」にかかると解される。しかし下接の連用句「一枝を」を受ける用言が見当たらないので一読「一枝」にかかるように解されてしまいそうである（ただし「おもちゃを親に捨てられた子供」のように、文法的には「捨てられた」にかかると解することが可能である）。

9) これも前の例同様、冒頭の連体句が次の体言「反すう動物」に接続する形なので、文意をすぐに把握することが難しいと思われる。殊にこの例はTV画面に表示されたテロップなので、正しく受け取られたかどうか心もとない。

10) この例にはいくつかの問題があるが、まず「世界でも稀にみる」が連体句としてどこにかかるか、なかなか分からないだろう。「平等に」「低コストで」「高度の医療が」の3語句はいずれも「受けられる」という用言にかかるもので、その順序も自由であるから、その前の連体句が「平等」にかかることはありえない。「国」にかかる句ということになるが、あまりに離れているためにそれを捉えるのはかなり難しい。3つの連用句の順序を原

文の逆にし、続けてそれを受ける連体形、その後に先の連体句をおけば分かりにくさが軽減できるのではないだろうか。

以上いずれも、前に発せられた語句を受ける成分が後続部分に見えなかったり（1～6）、受けると考えるには無理があったり（7, 8）、受ける部分が離れすぎていてすぐに文意を解することが難しかったり（9, 10）する例である。このように、修飾・被修飾の関係が複雑な文ではねじれ現象が起きがちで、外にも数多くの例が見られるが、おそらく頭の中で組み立てている文のほうが実際の作業よりかなり先行しているために起こることなのであろう。¹

3. 並列表現に疑問のある例文とその分析

文の統合の問題は修飾・被修飾の関係にだけあるのではない。以下のような例文はどうだろうか。

- 11) ドクトルは当時内科の専門医として有名だったと共に、演劇改良に関しても或急的意見を持っていた、一種の劇通だったと云う。
- 12) メーカーの不誠実な態度に驚きを禁じえないとともに、今回の事件は起こるべくして起こった感が強い。
- 13) うれしいとともに哀しい気持ちも捨てきれない。不思議な想いをもてあましているという感じだ。
- 14) いぶかしみとともに、まだ疑いの残る眼にうつった友子夫人は、蒼白く、哀しげで、
- 15) 純粋画家と同時にサロン人であった両棲的デカダン派であった最高の教養人の田能村竹田。
- 16) 保険料を徴収するもよし、しないもよしの選択を市町村に任せるなら、
- 17) マリナーズのように好スタートを切った球団もあれば、早くも4球団の監督が成績不振を理由に解任された。
- 18) ものの道理として上官の命は陛下の命であったから、新品であろうと、以前は階級が下であったろうと、今や陛下の命を私製して差支えなかった。
- 19) 「ここ数年は、野球部も強いとは聞いていたが、まさか優勝するとは。びっくりしたやら、うれしいやら」と喜んでいた。
- 20) かたやで信心づいたと思えば、かたやでは深酒がひどくなる。
- 21) 子供たちが宿題をしたり、その手伝いをしたりする指導者も置く。
- 22) (鯉に) 病気や傷、虫がついていないかを調べます。
- 23) 明日はくもりや雨の降るところが多いでしょう。
- 24) コミュニケーションを意識するほうが、印刷言語の世界から、無意味に難解や、自己中心的な文章を駆逐できるのでは、と主張する。
- 25) 髪がピンと立ち、つりズボン姿の男の子を主人公にした「クリちゃん」で知られる漫画家の根元進氏。
- 26) (獸頭人身像は…) V字形をした朱色の襟と、腰ベルト近くに左手を添えていた。

11)～14) は「とともに」の用例としてやや違和感がありはしないだろうか。これらの「とともに」は適切な使い方といえるだろうか。「とともに」でなければいけないのだろうか

か。少なくとも11)～13)は「と同時に」のほうが適切だと思うのだが。

15)の例では「と同時に」が使われているが、これは後の「サロン人であった」に合せて「純粋画家である」という形が「同時に」の前に来れば自然な文になるだろう。「である」がここに入ることによって、はじめて、同時に出現する二つの状態を表すことになる。「と同時に」は現在、接続詞のように使われることも多いが、同時に出現する二つの行為や状態を表す接続助詞のように使われる場合は、その前後の語句が用言でなければならない。しかも前の語句は過去形や否定形ではなく、現在形であるほうが自然ではないだろうか。「とともに」も用言に続く形だけが用いられるのではない。古事記の歌謡(下55)に「山県に 蒔ける青菜も 吉備人と ともにし摘めば 楽しくもあるか」とあるように、名詞について、または「ともに」の形で副詞のように、他と一緒に同じ行為を表すことを表す。しかし、用言に接続して用いられると、「ある状態や行為に伴って、同時に別の行為や状態が出現するさまを表す。」(『日本国語大辞典第2版』小学館)このうち、接続助詞のように使われる場合、「とともに」の前に来る用言は、「同時に」の場合と同じく、過去形や否定形では不自然である。これらに使われるのは現在形に限られるということになるだろう。さらに、厳密に言うと、その「現在形」はB.H.チェンバレンの言うinfinitiveに当たるのではなからうか。*A Handbook of Colloquial Japanese*²の§226に次のような記述がある。

When naming Japanese verbs, it is usual to mention the present tense as in Greek, not the infinitive as in English, Latin, and most other European languages. (日本語の動詞を示すのには、英語、ラテン語など大抵の西欧語のような不定詞ではなく、ギリシャ語のように現在形をいうのが普通である³)

その説明によると、例えば終止形ウル(売る)の意味としてto sellを当てるが、実はウルにto sellの意味はなく、I(又はyou, theyなど) sell. の意味を表すのであって、厳密に言うと日本語にはto sellの意味を表す形はないというのである。さらに§277で、

The certain present and certain past, sometimes followed by the word *koto*, “thing,” “act,” “fact,” to some extent replace the infinitive, a mood for which the Japanese language lacks a special form.(確定現在及び確定過去は、時にコトという語を伴い、日本語には固有の形のない不定詞の代わりをある程度つとめる)と述べている。日本人には「不定詞」という概念があまり身近でないために、このような記述も注意されることは少ないようであるが、参考にしてもよいように思う。

15)の例で言えば、「同時に」の前後がともに「である」であってもよく、「…であると同時に…である」という両棲的デカダン派であった」という形も認められる。その場合、「デカダン派であった」で括られる内容を示す「である」は現在形によってある時点を表しているのではない。このような形を「不定形」という概念で表しているのではないだろうか。

16)の「…もよし、…もよし」に入れる形も過去形では不自然だが、否定形は必ずしもそうとはいえない。用言の連体形であればよい。しかし、この例が不自然に感じられるのは文語的な表現の中に「しない」が使われているからであろう。このような対になった形を用いると、後が予想されて、文意が取りやすくなるという利点がある。しかし、それが途中で崩れると、文そのものが成り立たなくなってしまう。

17)がその例であるが、読み返しさえすれば防ぐことができる誤りと言えよう。

18) は「…であろうと…であろうと」という形になると思われる文の片方が「であつたらうと」という過去推量形になっているために違和感を覚えるのであろう。「以前は」と言う語があるために過去形を使ったものと考えられるが、「推量」とはいつでもこの対句に用いられているのは実は仮定の意味を表す用法と言うべきものである。

次の19)の例に使われている「…やら…やら」の形は、過去形が入る場合もあるが、それは疑問あるいは不確実なことを表す場合であって、この例のような並列表現の場合は終止形、というより上述の「不定詞」相当の語が入ると言うほうが適切ではないだろうか。

20) は対になる形そのものに対する解釈が変化したかあるいは誤解されたか、「かたや」を名詞として捉えているような表現になっている。

以上の例ではいずれも並列される内容がほぼ明らかに示されている並列表現である。それに対して、21) から26) に挙げた例は、文の流れからはそれを簡単に指摘しにくい形である。

21) は「…たり…たりする」という形になっているので、一見すると問題がないように思われるかもしれない。しかし、後の「…たりする」を受ける体言「指導者」が前の句をも受けると見るのは無理だと考えられる。文意不明と言うほかない。

22) ~24) は「や」で並列を示す点が共通している。

22)、23) では並列されている語群の中に後続の述語と対応しないものが含まれている。いずれも前に出した語よりも後の語との続き方に注意が向けられた結果であろう。

24) の例は「無意味に難解」をどの語句と並列しようとしているのであろうか。おそらく「自己中心的」とならべて「な」で受けようとした文であろうが、「や」で並べることができるのは名詞に限られる。

25) では動詞の連用形が中止法と思われる形で使われているが、受ける先が「主人公にした」であるとは考えられない。

26) では「と」が「朱色の襟」と「腰ベルト」を結んでいる形であるが、文意から考えるとそうではないようで、これも文意がはっきり伝わらない。

4. テンスの表現に疑問のある例文とその分析

27) キリンビールは昨年、日持ちの良いトマトの研究をやめ、花の研究を進める。

28) 公職選挙法の規定では…選挙区は、昨年9月16日以降に欠員が出て補欠選挙は行われませんが、

29) 中国・四国地方に大きな被害をもたらした芸予地震が起きた一週間前の本月十七日…研究会が…注意を呼びかけていたことがわかった。

30) 神長さんにいたっては、かつてセックスジャンキーだし、ペペさんも志高き活動家だったらしい。

31) 小泉総理大臣が沖縄から戻ったのを待って6時20分から開かれました。

32) 母は、びっくりしたあまり、とっさに答えが思いつかなかった。

33) 一見ユートピア的な条項であっても、現に政治や外交の場で他国とは目に見えた違いを生んできた。

34) さきほど2台目のバスも動き出しています。

35) 1999年の一月末には…「ある夫人の肖像」と…「若い男の肖像」を盗みだすと

いう事件が起こった。三月には…犯人が逮捕されたが、絵はまだ紛失している。

これらはテンスをどういう形で文に取り入れるかという点でやや不自然に感じられる例である。

27) ~29) は時を示す語が明示されている文である。27) の「昨年」のように明らかな過去を表す語をこの場合のように文末で現在形で受けるとするのは、アスペクト的な用法であるとしても、不自然である。もし、「昨年」は「やめ」だけに係るとするのであれば、読点の打ち方が不適切であるし、そのことを示す語句を連用形の後に続けることも必要であろう。

28) にも「昨年」という語が使われている。この文は「9月16日」という日付が選挙から何日目かということに関わっていて、その期限を過ぎたから「補欠選挙は行われぬ」というのであろう。それをこの文は分かりやすく表現しているといえるだろうか。「出て」という仮定条件の形と過去の日付との結び付きは適切といえるだろうか。

29) には「もたらした」「起きた」「呼びかけていた」「わかった」という4つの過去形が使われている。このうち「一週間前」につながる「起きた」は現在形「起きる」にしたほうが分かりやすい文になるのではないか。その時点では未来に属することだからであろう。

30) には「かつて」という副詞があり、文末の「だったらしい」との間は「…し、…も」という並立を示す形になっている。しかし「し」の前は現在形、後は過去を表す形になっている。並立の形として不自然であることは前章の例からも明らかであろう。

31) 「戻ったのを待って…開かれました」の「戻った」は29) の「起きた」と同じように、「待って」いる時点では未来のことと考えられるから、現在形にするほうが自然ではないだろうか。

32)、33) の文にはそれぞれ二つの過去表現が使われているが、連体修飾語句の過去形はやや不自然な感じを覚える。特に、「目に見える」は、「見える」という動詞としての機能よりも専ら連体修飾語として「目に見える」の形で用いられるのではないか。また、34) 35) はともに「ています」という形で文が終わっているが、34) には時間を表す「先ほど」という副詞が前にあり、35) には同じく「まだ」という副詞がある。「先ほど」は事の起こった時点をいう語であり、「動き出しています」というアスペクト表現とともに用いると不自然な感じがする。一方、「まだ」は「ている」と共に使われれば「今なお」「依然として」という継続の意味になるが、「紛失する」は状態の継続をいう語ではないだろう。

5. 日本語文の特徴

日本語による文の特徴として、チェンバレンは統語的な傾向が非常に強いことを挙げている。*A Handbook of Colloquial Japanese*でも、*A Simplified Grammar of The Japanese Language (Modern written style)*でもほとんど同じことを述べているから、話し言葉にも書き言葉にもそのような傾向があると見ていたようである。次に示すのは*A Handbook*の文である。

§ 442 Languages differ greatly in the degree of integration of their sentences. For instance, Chinese and Pidjin-English simply put assertions side by side, like stones without cement, as "He bad man. My no like he." Our more synthetic English would generally subordinate one assertion to the other, coupling them thus: "I don't like him,

BECAUSE he is a bad man.” Now one of the most essential characteristics of the Japanese language is the extreme degree to which it pushes the synthetic tendency in the structure of sentences. Japanese always tries to incorporate the whole of a statement, however complex it may be and however numerous its parts, within the limits of a single sentence, whose members are all mutually interdependent.⁴ (言語は文章の統合の程度で大きく異なる。例えば中国語やピジン英語はセメント無しで石を並べるように主張を並べるだけである。我々のもっと統合的な英語では二つをつなぎ、一方の主張を他に従属させるのが普通だろう。今日日本語の最も重要な特徴の一つは文章を作る際の統合的な傾向が極めて進んでいるということである。日本人はどんなに込み入った文でも長い文でも、必ずその構成要素が関連しあうようにして、言おうとすること全体を一つの単文におさめようとする。)

続けて彼はその例として「ヘンポーガエシ」という話を紹介している。

§443 アル ヒト ガ ナガヤ ノ マエ ヲ トーリマス トキ、イシ ニ ツマズキマシタレバ、ナガヤ ノ ウチ ノ ヒト ガ バカ ニ シテ、「アイタタ！」ト コエ ヲ カケマシタカラ、ツマズイタ ヒト ワ、イマ-イマシイ ト オモイマシタ ガ、ワザ ト オトナシク、「イヤ！ゴメン ナサイマシ！ケマシタ ノ ワ、イシ カト オモイマシタラ、アナタ ノ ハナ ノ サキ デシタ カ？」ト イイマシタ。

ナガヤ ノ ヒト ノ ココロモチ ワ、ドンナ デシタロー？

これについて、チェンバレンは、英語にするなら4つか5つの文にしたほうが分かりやすいだろうと助言する。事実、対訳の英語ではかぎ括弧内は別として、3つの文にしているし、このような日本語の文を英語らしい英語に直すには節目ごとに分ける必要があるとも言っている。日本語の母語話者としては、上のような表現法がそれほど極端に統語的だという実感はないが、分かりやすさという点から考えれば確かに短く切ったほうがいいだろう。前掲の例文の場合も、切ったほうがずっと読みやすく分かりやすくなる例が多いように思う。

しかし短ければ分かりやすいとは限らない。

「進駐軍の命令により、ここに塵芥を捨てるべからず」⁵

これは小説の中で、市役所の立て札の文言としてあげられているものである。文法的には「進駐軍の命令により」を受けるべき用言がないが、意味はよく伝わるであろうし、単に禁止すると言うよりはるかに威力があるだろう。しかも市民に不便を強いることになるとしても市役所の責任ではないといいぬけられるわけで、非常に効果的な文であると言えるのではないだろうか。作者が意図してこのような一種の非文法的な文を作ったものと考えられる。

チェンバレンは統語的な長い文を日本語の文の特徴としているが、現代日本の言語生活では、上の例のような長い文はほとんどみられない。それにもかかわらず、違和感を覚えるような例が少なくないのはなぜなのだろう。

現代のように時間に追われる生活では、話し言葉はもちろん、書き言葉でも、読み返して推敲する余裕は期待できないのかもしれない。最低限意味が通じればよいという考え方もある。文法は現実の文章から帰納的に体系付けるものだというのであれば、どのような条件の下で意味が通じるといえるのかを考える必要がある。現代の日本語表現が旧来のも

のと異なる新しい形になることも当然考えられる。とはいえ、できるだけわかりやすく、誤解されにくい文にすることが求められる点に変わりはない。例えば、

修飾語は被修飾語にできるだけ近づける

並立する場合は、まず並立の形を整える

など、きわめて当たり前の基本に留意することが必要だろう。チェンバレンらの言う「不定詞」という概念についても考えてみる必要があるだろうし、慣用的な言い回しの形を語形変化させて用いる場合は十分な注意が求められよう。

対等な関係にある二つ以上の事柄を並べるには、上に示した例文のようにさまざまな形があるが、いずれの形をとるにしても、並立する事柄が何と何であるかが明確に示されなければならないことは言うまでもない。修飾・被修飾関係の語句の場合もそうであるが、2つの事柄の関係は2つの間だけで完結するわけではない。文中にあって、2つの事柄の結びついた形でそれぞれの働きをするのである。文を構成する成分という段階で混乱が生じては正しい文意が伝わるとは考えにくい。

複数の用言がテンスやムードを同じくする場合について、チェンバレンやアストンはある決まりのことで取り上げている。例えばアストンのまとめ⁶を挙げると、

§ 182 The Rule by which, when two or more Verbs or Adjectives are coordinated in a sentence, the last only takes the inflection or particle belonging to all, the others being put in the indefinite⁷ form. (一文中に複数の動詞や形容詞が対等に使われているとき、全部に関わる語形変化をしたり助辞をとったりするのは最後のものだけで、それ以外のは不定形にしておく。)

テンスは事柄の起きた時点と発話時点または基準となるある時点との先後関係を表す概念であるが、明らかに過去を表す語が文中にあるとき、それを受ける用言が過去を表す形になっていないのは整合性に欠けるものというべきであろう。また慣用的に使われる語句に含まれる活用語を活用させて、「昭和20年代の末から昭和30年代にかけの記述」⁸とか「時代を先取った発言」⁹などのように用いるのも不自然に感じられる。このような語句にテンスの概念は不要なのではなかろうか。

6. まとめ

英語では、文を後へ後へとつなげて修飾限定していく構造になっているのに対して、日本語は細かい事柄を積み上げて最後にまとめる形で文を作っていく。これが統語的といわれることにつながるのであろうが、また違和感を覚える文になりやすい原因にもなるのであろう。修飾語句が後の被修飾語句に適切につながらないのも、並立するはずの語句の後半部が不適切な形になるのも、テンスがちぐはぐになってしまうのも、あまり先のことにばかり注意が向けられてしまうことに原因の大半があると思われる。前掲の例文のうち、22)・23)・31)・34) 以外はいずれも活字化された文であり、約半数の12例が新聞の文である。新聞の文章は時間的な制約が大きく、十分な校閲が期待できない場合もあろう。しかし、例に挙げたものの多くはニュース性がそれほど高くない記事と思われるから、書いてから活字になるまでの時間はいくらかあるのではないか。書き始めたときに考えた形式はもちろん整ったものであったに違いないが、先を続けるうちに後の用言や被修飾語に引かれて統語的な視点から見ると外れる結果になってしまったものと考えられる。もう少し

し文の統合という点が考慮されれば分かりやすい文になったのではないだろうか。何より必要なのは、自分の書いた文章を読み返してみる余裕かもしれない。

例文出典

- 1、飯田竜太『紺の記憶』（角川書店 '94)
- 2、02年5/1朝日新聞（以下「朝日」と略す）夕刊 PEOPLE
- 3、イサベラ・バード『日本奥地紀行』高梨健吉訳 凡例（平凡社 東洋文庫 '87）
- 4、クララ・ホイットニー『クララの明治日記』一又民子訳 下p.240（中公文庫 '96）
- 5、小林和男「エルミタージュの緞帳」p.232（日本放送出版協会 NHK ライブラリー140 '01）
- 6、「ちくま」00年7月号 吉村昭
- 7、石光真清『望郷の歌』p.230（中公文庫 '96）
- 8、渡辺澄子『青鞥の女・尾竹紅吉伝』p.284（不二出版 '01）
- 9、01年9/30サンデーモーニング 画面
- 10、99年7/1朝日 夕刊 原田正純・私空間
- 11、芥川龍之介『開化の殺人』（角川文庫 '68）
- 12、00年9/20朝日 論壇
- 13、塩野七生『三つの都の物語』p.48（朝日新聞社 '99）
- 14、山田風太郎『エドの舞踏会』山県有朋夫人（文春文庫 '86）
- 15、中村真一郎『木村兼葭堂のサロン』p.244（新潮社 '00）
- 16、99年11/19朝日 論壇
- 17、02年5/1朝日
- 18、富士正晴『帝国陸軍に於ける学習・序』10（六興出版 '81）
- 19、03年7/31朝日 多摩
- 20、佐藤賢一『カルチエ・ラタン』p.40（集英社 '00）
- 21、02年10/9朝日 ウッズ談
- 22、03年5/11 NHK 小さな旅
- 23、00年1/5昼NHK 天気予報
- 24、02年2/22朝日 夕刊 飛耳長目
- 25、02年1/8朝日 39面
- 26、02年1/22朝日
- 27、00年5/13朝日
- 28、01年6/13朝日
- 29、01年3/29 朝日
- 30、「ちくま」00年7月号 宮台真司
- 31、03年5/17 NHKニュース
- 32、『ソフィーの世界』池田香代子訳 p.32（日本放送出版協会 '95）
- 33、97年9月以降 朝日 米ローレンス・ビーア氏
- 34、97年12/23NHKニュース
- 35、朽木ゆり子『盗まれたフェルメール』p.71（新潮選書 '00）

注

1) できるだけ原文の表現に添った形で書き換えの一案を示す。

[修飾・被修飾関係]

1) われわれが中学生だった頃は・・・ 2) 二人は数年前、ライス氏がスタンフォード大学の教授だったときに・・・ 3) 本書は・・・約3ヶ月間、東京から北海道まで旅行した際の記録で 4) 水曜日の午後1時半に堀切へどうぞという招待状が・・・ 5) ナチスドイツの犯行がソヴィエト政権による虐殺であるかのごとく報道することは許せない。 6) 夜間空襲は、焼夷弾によって都市を焼きはらうことを・・・ 7) もしロシア帝国との戦いに敗れていたら、東洋は全面的に欧米の植民地にされて・・・ 8) 一枝を、夫に捨てられた妻とみる従来の説が・・・ 9) 反すう動物への肉骨粉の使用禁止。 10) 日本は、地域による条件の差はあるとしても、高度の医療が低コストで平等に受けられる、世界でも稀にみる国である。

[並列表現]

11) ドクトルは・・・有名であると同時に、演劇改良に関しても・・・ 12) メーカーの不誠実な態度に驚きを禁じえないばかりか、今回の事件は起こるべくして起こった感が強い。

13) うれしいと同時に哀しい気持ちも捨てきれない。不思議な想いを・・・ 14) いぶかしく思うと同時に、まだ疑いの残る眼にうつった友子夫人は、・・・ 15) 純粋画家であると同時にサロン人でもあった両棲的デカダン派で、最高の教養人の田能村竹田。 16) 保険料を徴収するか、しないかの選択を市町村に任せるなら、 17) マリナーズのように好スタートを切った球団もあるが、一方では早くも4球団の監督が成績不振を理由に解任された。

18) ものの道理として上官の命は陛下の命であったから、新品であろうと、以前の階級が下であろうと、今や・・・ 19) 「ここ数年は、野球部も強いとは聞いていたが、まさか優勝するとは。びっくりするやら、うれしいやら」と・・・ 20) 一方で信心づいたと思えば、また一方では深酒がひどくなる。 21) 子供たちが宿題をしたり、その手伝いをする指導者を置いたりする。 22) (鯉に) 病気や傷がないか、虫がついていないかを調べます。 23) 明日はくもったり雨が降ったりするところが多いでしょう。 24) コミュニケーションを意識するほうが、無意味に難解な、また自己中心的な文章を印刷言語の世界から・・・ 25) 髪をピンと立て、つりズボンをはいた男の子を・・・ 26) (獣頭人身像は…) V字形をした朱色の襟の衣裳を身に着け、腰ベルト近くに左手を添えていた。

[テンス]

27) キリンビールは昨年から日持ちの良いトマトの研究をやめ、花の研究を進めている。

28) 公職選挙法の規定では・・・選挙区は、期限を過ぎた昨年9月16日以降は欠員が出ても補欠選挙は行われませんが、 29) 中国・四国地方に大きな被害をもたらした芸予地震が起きる一週間前の今年十七日・・・研究会が・・・注意を呼びかけていたことがわかった。 30) 神長さんにいたっては、かつてセックスジャンキーだったし、ペペさんも志高き活動家だったらしい。

31) 小泉総理大臣が沖縄から戻るのを待って・・・ 32) 母は、びっくりするあまり、とっさに答えが思いつかなかった。 33) 一見ユートピア的な条項であっても、現に政治や外交の場で他国とは目に見える違いを生んできた。 34) さきほど2台目のバスも動き出しました。 35) 1999年の一月末には……。三月には・・・犯人が逮捕されたが、絵はまだ紛失したままである。

- 2 第2版。1889年刊。
- 3 訳文は『チェンバレン『日本語口語入門』第2版翻訳』（大久保恵子編・訳）による。
- 4 *A simplified Grammar of the Japanese Language* では、Except when modified by Chinese or other foreign influenceと例外に言及したり、mutuallyをgrammaticallyとしたりしている。
- 5 大西巨人『五里霧』同窓会（講談社 '94）。
- 6 *A Grammar of the Japanese Spoken Language* 第4版 1889年刊。
- 7 上のindefinite form（不定形）というのは27)の例に挙げた中止法のように用いられる連用形をいうが、チェンバレンは、不定形を使うのは高等な文体で、一般には「て」についた形が用いられるといている。
- 8 01年2月4日 朝日新聞 読書—北上次郎『推理作家の出来るまで』。
- 9 渡辺澄子『青鞥の女・尾竹紅吉伝』p.247。